

『思い思いの若者たち』

世の中は不条理に満ちているが・・・

法人理事 布袋 太三

先日ヤングケアラーのドラマを観た。重いうつ病を患う母と幼い妹の世話に忙殺される中学生ケアラーの話だ。こんなふうには必死でがんばらなければならない中学生が今の日本には相当数いるという。きっと私たちの町にも人知れず辛労を重ねる健気な中学生が何人もいるにちがいない。

たしかにいつの時代も貧困に押し潰されそうな少年たちはいた。私が学生時代に通った荒川の夜間中学生たちもそうだった。東京の当時のこの一帯は小さな町工場が連なり、なぜか訳ありで貧しい人々が多かった。中でも際立って貧困な家庭の中学生はそのわずかな稼ぎも当てにされていた。だから彼らは昼間は働いて夜に学校へ来ていたのだ。

親とうまくいかない時など、彼らは苛立ちを陰しい表情で表すこともあったが、教室に入ると大抵は解き放たれたように屈託のない少年に戻っていた。それはこの学校の教師たちがかなりの優れ者ぞろいだったからだと思う。どの教師も実に献身的で温かみもユーモアもあって、しかも一人一人の生徒の事情に深く精通していた。私はこの教師たちを見ていて、本当に「いい教師」さえいればどんな酷い環境にある少年でも確かな希望の糸を必ず紡ぎだせるものだと思うようになった

あれからほぼ60年経った。思わぬことから私はあの夜間中学での日々を今ありありと思い出している。彼らはヤングケアラーの走りだったのだ。この国は思春期の少年たちにあまりに苛酷な負荷を今もかけ続けている。

こんなことでいいはずがない。どの子も大事に育てられるべきは自明のことなのだ。

ところで、このところ全米各地の大学では学生たちの反戦デモが日を追って拡大している。イスラエ

ルの執拗なガザ侵攻をアメリカの大学当局が容認したり支持したりしていることに対する抗議の行動である。

学生の中心は50数年前もアメリカのベトナム侵略戦争に激しく抗議したコロンビア大学の学生たちだ。彼らの姿は映画『いちご白書』で世界中で紹介されたので憶えている人もいると思う。日本では少し遅れたが『いちご白書』をもう一度」というフォークソングが大流行した。反戦集会やデモに参加していた学生がやがて自らの就職の前に長かった髪を切り、そうした運動から退いていくというこの歌はあの頃の日本の多くの若者たちの心をとらえた。

♪君も観るだろうか『いちご白書』を二人だけのメモリー何処かでもう一度♪とリフレインされるユーミン作曲のどこか哀調漂うこの歌を、ふっと自然に口ずさんでしまう中高生は今もいそうである。現に私の書斎には今静かにこの歌が繰り返し流れている…。

ともあれ、かつての若者たちの反戦の訴えはあの長く残酷だったベトナム戦争を終結させた。ひょっとすれば今回も、学生たちの訴えはウクライナやガザの戦争を止めることに繋がっていくかもしれない。

「なぜこんなにも非道な戦争が続くのか」「街を壊し、人を殺してその後には一体何があるというのか」「核も使うつもりなのか…」

次代を担う若者たちの切実な声はどれも極めてまっとうである。世界は彼らの声に誠実に耳を傾けるべきだと私は強く思っている。



はじめまして

青少年ネット安全・安心のための環境整備事業

所長 佐々木 哲

本年4月から、ハートツリーで仕事をするようになった佐々木と申します。主にICTの分野で仕事をしてきました。特に、ここ10年あまりは子どもとICTをテーマとすることが多く、年に数十回は学校を訪問しています。

子どもとICTは、大きく2つの分野での関わりがあり、1つは学び（学習）におけるICTの活用です。教育DXやEdTechと言われることもあり、生徒1人に1台のタブレットやPCが配布されたGIGAスクール構想が代表的な例です。この分野では、学校内ネットワークの整備や先生向けのICT活用教育研修などの仕事をしてきました。

もう1つは、子どものインターネット（ネット）利用で、「ネット依存」「ネットいじめ」などの総合的にネガティブに語られることが多い分野です。

子どもたちへのガラケーの普及とともに登場した学校裏サイトが大きく取り上げられたのは、21世紀に入って間もなくのことです。それ以来、様々な調査から、子どもたちがネットを利用する時間が増えてきていることがわかっています。学校や部活、習い事、睡眠を除いた時間はいつもネットにつながっていると思えるほどです。多くの時間をネットで過ごすことは様々な価値観に触れることでもあります。様々な価値観を身につけた子どもたちの行動は、時に「非常識」な行動として「世間」から非難を受けることがあります。

子どもたちが一見問題のある行動を示す背景を考えると、ネットのなかった時代の子供（今の大人）は、成長とともに、様々な価値観に緩やかに触れて人格を形成してきたことを思い起こせばいいのかもしれない。

大人が今の子どもと同じような体験をすることは難しくても、すでに多くを経験してきた大人なら、子どもの話を聞き、想像し、理解し支えることはできるでしょう。

矯正なのか強制なのか共生なのかを自問しながら、日々ネットで子どもたちを見守ってまいります。



所長 佐々木 哲

